

ウッドマイルズフォーラム2009～森林～木材～家づくり、持続可能な循環を目指して！

座談会 詳細記録

日時 / 2009年6月27日(土) 13:10～15:00

場所 / AP浜松町 Aルーム

(記 / ウッドマイルズ研究会事務局)

座談会 「森林～木材～家づくり、持続可能な循環を目指して、進むべき道を語る」

〔森 林〕 箕輪光博氏 / (社)大日本山林会副会長
〔木 材〕 藤原敬氏 / (社)全国木材組合連合会常務理事
〔家づくり〕 藤本昌也氏 / (社)日本建築士会連合会会長
〔司会進行〕 三澤文子氏 / (有)MOK-msd 代表

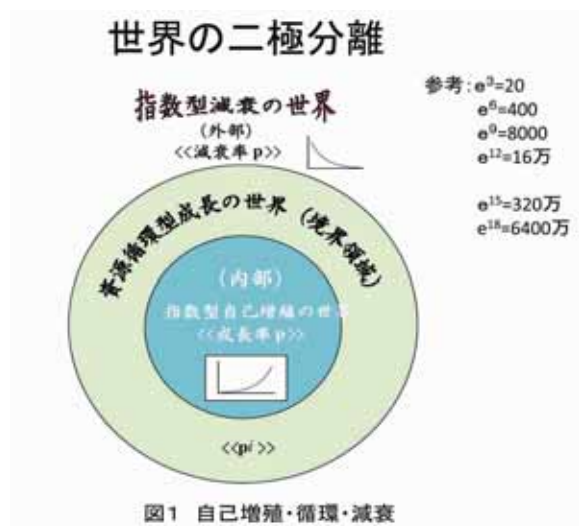
はじめに、各々の立場から現在の状況や課題について

三澤 私はこの3月まで、岐阜県立森林文化アカデミーで教員をやっていました。この学校は本日のフォーラムのテーマでもある「森林～木材～家づくり」、つまり山から町までを、「木」を通じてつなぐ教育を行っているユニークな学校です。現在はmsdという会社を立ち上げましたが、藤本さんの挨拶にもあったように、今、建築士はやらなければいけないことがたくさんあり、あらゆるものを定量化(見える化)しなければいけない状態になってきました。単に設計するだけではなく、各々の技術面を高め、対応できる組織づくりを行っています。早速、座談会の方に入っていきますが、まず始めに本日のテーマ「森林～木材～家づくり」について、山から町へ下っていくイメージで、3名の先生方に、森林、木材、建築という立場から、各々の専門や活動の紹介に合わせて、現在どのような状況で、どのような課題が見えているのかについて、お話し頂きたいと思います。

箕輪 昨年林野庁で発足した「見える化」委員会で、ウッドマイルズの藤原さん、滝口さんとも一緒に、ウッドマイルズは知ってはいましたが、あまり詳しくは知りませんでした。その席で、「見える化に際しては、環境貢献度を定量化する色々な指標を統合しなければならない、持続可能な森林経営を考えた時には、色々な指標が一人歩きしては達成できない」、と言ったことがきっかけでウッドマイルズフォーラムの講師を引き受けるに至りました。

私の専門は森林経理です。日本での歴史は100年ですが、ドイツでは200年の歴史がある学問で、一言で言うと「森林の時間的空間的秩序付け」です。もっと簡単に言うと「杉や桧の林をどこにどれだけ配置し、いつ伐採するか、ということを決定する実学」です。私自身、色々やってきましたが、最終的には森林経営の評価方法について、より広い観点から考えることに行き着きました。植林、伐採、素材生産という森林サイドでは、どうしても山側の狭い領域で森林経営(林業経営)の問題を考えますが、これからはもう少し範囲を広げて考えていかなければなりません。環境も考慮しなければなりません。従来色々な評価方法がありましたが、この辺りについて検討してみたということが、大学での研究者としての最後の仕事です。私の恩師が昭和40年に、新しい評価方法論を出しました。経済の分野でものを評価する時には、通常「割引率(discount rate)」が使われ、将来の便益、費用を現在に還元する場合に欠かすことのできないものですが、このような考えで森林・林業の評価も論理的に考えられてきました。これに対して、森林・林業経営において割引率を使うのはおかしいという観点から、新しい方法論を展開された人です。私もこれを

受け、さらに林業経営を取り巻く環境(製材業、建築業、その他色々な関連業種)という広い視点から見なければいけない、それからエコシステムマネジメントという言葉がアメリカにあります、エコロジーという視点も入れないと、本当の森林経営の資産評価はできない、林業経営における伐採期間(回す期間)を u 、それを取り巻くエコロジー、経済などを T として、200 年住宅、数百年の樹木の寿命、二酸化炭素の循環など、それを包むような大きな循環のなかで林業経営を捉え、相対比(u/T)によって森林の価値を定める、といった理論的なことをやりました。現在色々な「見える化」の動きがありますが、そもそも学問は、自然や社会を対象に「見える化」をやっている訳です。単に数値化するだけではなく、論理的に図形的に表現することが、学問の仕事だと考えてきました。皆さんのお手元の資料にある、農学アカデミーに出した論文「現代経済社会の「見える化」に対する一つの試み」は、数学で現代社会が読み解ける、ということを書いたものです。現代の社会は、環境は劣化し二酸化炭素は増えていく、物事が増大していく現象と、資源が減少していく現象の、二極に分離している傾向があります。特に工業社会の場合はその傾向が激しい訳です。



参考: $e^2=20$
 $e^6=400$
 $e^9=8000$
 $e^{12}=16万$
 $e^{15}=320万$
 $e^{18}=6400万$

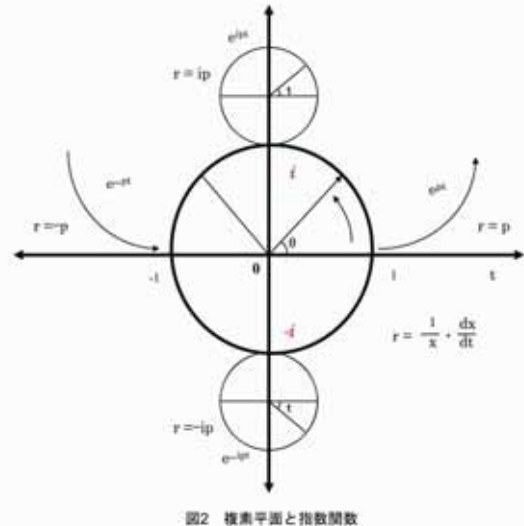


図1のように、内部は自己増殖、外部は劣化していくという世界があります。その中間に、ある一定の周期をもってゆらいでいる境界領域というものがあり、これが農業や林業、漁業というものだと思います。それから図2は、数学の複素空間というもので、X軸が実軸(1と-1)、Y軸が虚数軸(iと-i)の円です。この円はiのゼロ乗 = 1 を出発点に、iを掛けるごとに時計と反対周りに回っていきます。1 i -1 -i 1と、4回掛けると戻ってきます。春夏秋冬の如く循環します。このような循環の世界が本来の世界ではないかと思っています。縄文や弥生時代には元々このような循環の世界があったのだと思います。その後工業社会に向けて我々がどのように変化してきたかを表しているのが、図のX軸右端で増大している矢印です。X軸左端は減少の矢印です。元々循環の世界から自己増殖・減衰する世界に必然的に移ってきています。この円の中の相対成長率(r)というもの、我々の GNP、GDP もそうですが、必ず一定の成長率をもって動くという考え方が入ってきたが故に、この円がつぶれていきます。そしてこれと裏腹なものが割引という考え方で、指数関数で未来を割引く訳です。経済学でいう割引の考え方は構造的にはここにあります。これに対してむしろ成長を否定的に考える「i」を成長率とすると、Y軸方向にもう一つ円が生まれます。円が円を生むという方向になってきます。これを現代社会の「見える化」と、この論文では書いていますが、円をつぶすX軸と、円が円を生むY軸の中間あたりに現実の社会はあるはず。そのバランスをとるのは政治の役割だと私は思っています。ところが日本の経済も世界の経済も、ただひたすら利益を上げる、資源を食いつぶす、ということをやっています。

今日の話のテーマに戻りますが、このように本来循環すべき円がつぶれてしまうのを避けるために、ウッドマイルズがあると思います。世界のあらゆる国からエネルギーを浪費して木材を運んでくる、ある程度ペイされるから成り立っていると思いますが、今やエネルギー大量消費型の生産プロセスは終らなければいけない、そういう意味で、ウッドマイルズにはそれなりの力があるものだと考えています。我々のやっている持続可能な森林経営や、森林認証や、ウッドマイルズに象徴されるような環境をはかる動きは、文明的なものです。あと 100 年くらい経ったら、循環型の構造を持っている森林、林業、木材業関係は、素晴らしいものになるに違いないと私は確信しています。また、伊勢神宮の遷宮のように、回っていくという考え方が日本には元々あるのだと思っています。

藤原 箕輪さんよりウッドマイルズは色々な可能性がある、と言って頂きましたので、6年前に研究会を発足させ、その後どのような考えでやってきたかについて、最初にお話したいと思います。ウッドマイルズとは木材の輸送距離のことです。別の視点から言うと、森林と木材消費者の距離です。これを通じて木材利用と地球環境について考えることが、ウッドマイルズの意図です。距離には2つあります。一つは物理的距離で、輸送過程での環境負荷に関係するものです。輸送距離が長いと、製造エネルギーよりも輸送エネルギーの方が大きくなります。もう一つは心理的距離です。消費者が木材の生産地の環境(再生しているかなど)を把握し、その結果、環境にやさしい木材ということを認識するためには、距離も重要であると思います。ウッドマイルズは我々日本発祥のものですが、何故日本発かということについては、世界で最も木材を輸入している米国の4倍ものウッドマイルージをかけて、日本が木材を調達しているという現状にあります。マイルージに対する環境負荷について、世界に先駆けて色々情報発信することが、ウッドマイルズ研究会の役割でもあり、各関係者とも連携して、地域の資源循環の構築に少しでも寄与したいと思っています。

藤本 建築設計という立場で、木造住宅についても二十数年やってきました。現在は 47 都道府県の建築士会を束ねた日本建築士会連合会の会長としての仕事もやっています。ここでは連合会の立場からお話したいと思います。現在のウッドマイルズ研究会の目標一つに、「木材に関する環境指標の普及および統合」があります。建築士会の方でも「地域材による地域住宅づくりの普及活動」をやりたいと昨年から考えていますが、この普及活動において、ウッドマイルズは一つの武器になると思っています。そして、設計者や工務店といった専門家の方々に普及するために、「環境の時代と木造住宅～地産地消の家づくりに向けて」という書籍を発行しました。これはまさにウッドマイルズの考えそのものになっていると思いますが、ウッドマイルズも含め、地産地消活動を成功させている各地の実践事例を紹介しています。このようなものが建築士を啓蒙していく一つのテキストになるので、今後研修会等で活用していく予定です。もう一つは全建連(全国中小建築工事業連合会)が、国の政策の中で重要な役割を担ってきていることです。福田総理時代に提唱された 200 年住宅について、国交省でも 200 年住宅について議論が始まり、住宅の前に 200 年もつ町づくりが大切など、色々な意見が出ていますが、200 年と言うのは象徴的な言葉で、制度としては、長期優良住宅というものが出来ています。この普及において、全建連が一つのターゲットになっています。長期優良住宅を普及させるための国の補助事業(長期優良住宅先導的モデル事業)が昨年からはまり、昨年度は 700 件以上の募集があり、50 件ほどが採択されましたが、ほとんどがハウスメーカーで、在来的なところは少なく、全建連がその一つでした。全建連では、国の要求する仕様に、全建連仕様を加えて採択されましたが、その一つに国産材の使用があります。反対もあったそうですが、これを入れなければハウスメーカーに勝てないと、全建連会長が説得にあたったそうです。木材の地産地消にも、建物

の高耐久にもなる全建連仕様は、昨年に引き続き今年度も多額の予算がついていますので、皆さんもチャレンジしてみてもいいでしょうか。

今は建築士に対する普及活動をしている訳ですが、最終的にはユーザーが理解しないと普及しません。200年住宅は200万円という補助があるので大きなインセンティブがありますが、地域材を使う、環境に負荷をかけない家をつくる、ということがスムーズに理解されるかと言うと難しいです。これに対して我々建築生産者、または川上川下の人達が、何をすればいいのか、ということが課題だと思っています。

ユーザーの盛り上がり、山側は大丈夫？ 木材の品質は？

三澤 始めにそれぞれの立場でお話頂きました。私も藤本さんの弟子でもあり、設計者として活動していますが、藤本さんが指摘されたエンドユーザーとは日々接して仕事をしています。ウッドマイルズ指標の詳細な結果をユーザーから要望されたことはありませんが、その意味などを分かり易く説明するためには、まず一般の人よりもはるかに知識がないと説明できないということがあると思います。それから今の住まい手はインターネット、雑誌などで、とても勉強してくるので、木材の産地をちゃんと証明して欲しいという要望も多々あります。森林認証など、一般的にはかなりレベルの高いことも言ってきます。このような中で、私達は木材を使う立場として、木材の履歴をしっかりと証明する、森林認証材を要求する、地域材の合板を使う、などやるべきことが色々あります。

ただ一方で、このようなことは森林にとってはどうなのか。ウッドマイルズもPRして、地域材をどんどん使った場合、50年くらいしたら山がたいへんなことになっている、ということにはならないだろうかという心配もあり、この辺りについてもっと関係者で情報交換を活発にした方が良いのではと感じています。もう一つ木材について注文すると、性能をちゃんと明示して欲しいと言っても出来ないという原状が、地域材にはあるかと思っています。地域材を使うということが、我々にとっても大きな流れになりつつあると感じていますが、これらのニーズに対して、山や木材の現状についてお聞きしたいです。

箕輪 現在日本の林業は色々な問題を抱えています。一つは各々の森林所有者が、自分の山がどこにあるのか、どのような状況なのか、分からないという現状です。もう一つは、林業も伐採活動が盛んになりつつありますが、伐採した後きちんと植林が出来ず放置されているという現状です。この2つをどうするかが最大の課題です。林野庁の方々も一生懸命はやっていて、新生産システムもそれなりの努力の成果だと思います。業界の方もかなり活発に生産活動をやっている、林業を活性化させる効果があると思いますが、問題は将来の森はどうなるのか、今はどんどん伐って安い材が出てきて、その後植えられないという状況が続いたら、日本の山はどうなってしまうのか、という心配があります。そこでやはり森林認証制度や森林計画制度が機能しなければいけないと思います。このような山側の技術、制度、現状などをエンドユーザーに理解してもらうことが一番大事だと思います。私も住宅のエンドユーザーという立場からすると、住宅に今のような制度があって、どのような支援があるか等、全く分かりません。木材、建築、施主と、まだまだ連携が足りないと思いますし、頭では分かっていますが、実際にどのような連携をつくるかということは難しい課題だと思います。昨年、東大で産官学連携プラットフォームの立上げシンポジウムがあり関係者とディスカッションしましたが、そこでCCV(サークル・チェーン・バリュー)という考え方、つまり循環型で川上と川下がチェーンで結ばれているようなものが、一番重要であるとした活動をどう展開するか、ということをお話しましたが、今でもこれが一番重要だと考えています。

藤原 ユーザーがだんだん変わってきている方向の一つが地球環境で、単なる価格と性能だけではない、ということに関心が高まってきているのだと思います。木材業界自体、木材がエコだといいい続けてきたことがいよいよマッチしてきたということで、木材が持続可能な社会の主役であるべきだということについては今日の会場でもコンセンサスがあることだと思います。そして次の段階として、木材なら何でも大丈夫なのか？という問いかけが、ユーザーから出てきているのだと思います。これからは、カーボンストックや間伐貢献といった環境貢献、カーボンフットプリントやウッドマイルズといった環境負荷、さらには再生可能性、生物多様性についても、各々の木材にある一定の情報が付くことが必要だと思います。ただ木材のマーケットにおいて、例えば森林認証材は一般材に比べコストがかかるのも現状で、コストと信頼性のバランスはとても難しいものがあります。全木連では合法木材の普及を行っていますが、森林認証に比べると少しグレードは落ちるかもしれませんが、特に世界の違法伐採問題に対して、ちゃんと合法的な木材をエンドユーザーに届けようという木材業界のシステムですので、皆さんも気にして頂きたいと思います。せっかくエコだと思って買った木材について、その後森林がどうなるかということは、とても重要な点ですし、環境指標にとっても大切なポイントであると思います。

三澤 環境指標については良く分かりました。一方で木材の性能ですが、設計業界もたいへん厳しくなってきた、各性能を明示することが問われてきています。工業製品ではない木材のような性能が不確かなものを使うことは、全て設計者が責任を負わなければなりません。そのようなリスクまで負って使う設計者は少ないと思います。ここからは山側VS町側ではないですが、藤本さんに木材の使用者側の要望を訴えて頂けたらと思います。

藤本 三澤さんが言われるように、情報を欲しがるユーザーはたくさんいて、我々供給者側はもっと情報を開示しなければいけないと思います。それからユーザーの前に我々川上、川下という供給者の連携がまだまだうまくいっていないとも感じています。この川上、川下の連携というのは、二十数年前もテーマでした。局地的にうまくいっている地域もあるので、全く駄目だという訳ではありませんが、全体としてはまだまだ問題のあるテーマだと思います。私も今ある地域で地域材による公共建築を手掛けています。地域の森林から採れる5寸材を使用した構造ですが、木材の品質として、乾燥はできればD20、強度もE70程度確保することが構造上の条件でした。しかし供給側からは、D20の乾燥材は出せない、強度は分からないと言われてしまいました。その後議論や協議を重ね、何とか要求の材を用意してくれることになりましたが、用意に1年くらいの時間がかかり、発注者が1年後期を延ばしてくれたので実現しています。商品としての木材を出す以上は、ユーザーの要望を満たさないものは使われる訳がないです。地域材を出したいと言っている地域ほど、このような供給体制が未整備であり、楽観できる状況ではないと思っています。

川上～川下の連携、山側の努力は？

藤本 最近の話題として、国が提唱するワンストップサービスがあります。各地でユーザーに対して地域材情報を発信すると共に、設計者も紹介する、というサービスですが、このシステムは疑問です。ユーザーが一番近いのは工務店や設計者です。その時、我々が知りたい情報は、どこに、どれくらい、いくらで、どのような木材があるのか、です。このような情報を提供できる産地は少ないです。ワンストップサービスは、ユーザーではなく、我々川下側に対するものにしてもらえれば、地域材ですぐに家が建てられます。このように専門家同士の連携が分断されていて、うまくいっていないと感じています。

「環境の時代と木造住宅」の書籍の中に、広島「木の香る住宅工房」の事例があるが、このきっかけを作ってくれたのが、当時広島におられた藤原さんです。この活動で設計者や生協が目覚め、県の事業終了後も活動が継続しています。大きな活動ではありませんが、地域で川上と川下が連携して住まい手が納得できる家を提供するという活動です。このような活動はオールジャパンでやるのは無理があり、県や各地域単位でゲリラ的に行うことが必要です。活動を行うためには、キーマンとなる人も必要です。局地的な活動を同時多発的に行う、制度ではなく運動として展開することが最も近道だと感じています。その一つの運動体として、また川上と川下の出会いの場として、ウッドマイルズ研究会が機能すると良いと思っています。

三澤 地域でゲリラ的な活動をというお話がありましたが、会場の関係者からもお話を頂きたいと思います。新潟県でも新たな動きが始まると伺っていますが、新潟県の二野宮さん、いかがでしょうか？

二野宮(会場) 新潟県で行政という立場で、人と人を木で繋げたいという思いでやっています。地域の設計者や大工さんなどに話をする機会も多く、ウッドマイルズ研究会立上げ当初から、ウッドマイルズの話も少ししていました。5年くらいやって昨年ようやく、ウッドマイルズの話をして下さい、というオーダーが来るようになりました。昨年は5回ほどウッドマイルズの話をしてきましたが、やはりこのようなものは時間がかかると思います。川上から川下までの連携は、人と心をつなぐことです。責任の範囲が増え、現場では色々な問題も出てきますが、問題ばかりを言っていてもしようがない、と思います。新潟県では昨年先行してカーボンオフセットに取り組み、今年度はウッドマイルズに取組む予定です。ウッドマイルズだけではなかなか、という悩みもありますが、どのような表示をしていこうか、制度化に向けて取組を始めました。現在そのスタート地点で、関係者の意見交換を行っています。まだ形にはなっていませんが、形になりましたらまた報告したいと思います。昨日別の会で集まったときに気づいたことがあります。ウッドマイルズは、外材よりも地域材の方が二酸化炭素の排出が少ない、というイメージが湧きますが、海外でバイオマス発電により非常に合理化された大きな工場で生産し、船で運んでくると、ずっと安かったという話を聞き、この辺り地域材はどうなんだという問題も内在していますし、お金、環境、人の暮らし、全てが関わってくる問題で、頭がぐるぐると回りそうな毎日です。

三澤 バイオマスのお話が出ましたが、ウッドマイルズ研究会前会長の熊崎さんも会場にいらっしゃいますが、いかがでしょうか？

熊崎(会場) 現在はペレット協会におります。今一番考えているのは、いよいよ CO2 を削減しなくてはいけなくなり、2050年までに80%削減することになったら、日本はとてもしんどいです。ヨーロッパに比べ風資源が無く、太陽光を受ける面積も小さい、再生可能なエネルギーを稼げる余地はとてもしんどい訳です。今のところ化石燃料に代わって安くなるものは木質バイオマスです。しかし乱暴に伐ったら一発で無くなってしまいます。そうすると80%削減という状況の中で、日本に残された大きな資源は森林です。エネルギーばかりではなく、この森林をどうやっていくか、やはり一番元になる、材木を育てて建築物を作り、使えない木屑をエネルギーにして回していく、という体制をつくらなければいけません。またエネルギーとして使う場合、発電所の燃料に全て使うということになったら、発電所は木材の持っているエネルギーの3割程度しか電機に変えられないので、熱利用が注目されています。冷暖房としての利用が最も良い訳です。日本では具体的な論議が全く進んでいませんが、イギリスでは2050年までに8割減らすと法律で決めて

しまいましたので、どうやって減らすのか、具体的な戦略がだんだんはっきりしてきています。イギリスは森林資源が豊富ではありませんが、この限られた森林をどうやって使っていくか、その中でうまい森林の使い方は冷暖房としての利用です。冷暖房は建築と深い関係にあり、家庭の消費エネルギーの削減はとても可能性があります。住宅構造物を変えていくことが先決で、さらに木質系の再生可能エネルギーで熱を作る、この建築物と再生可能エネルギーは、近い将来日本でも、非常に大きなポイントになってくると思います。それから今まではウッドマイルズ研究会会長というとてもつらい立場でした。例えばドイツのウッドマイルージが低く日本のマイルージが高いということはどういうことか、これは日本の林業が日本の建築の需要に答えていないということです。ドイツでは日本の森林の半分もないのに、木材生産量は7千万 m³を超えています。日本は2千万 m³で、ドイツからも輸入しています。こんなにおかしな話はありませんが、ドイツの工場では太い丸太がごろごろ出てきます。200年住宅もたくさん作れます。日本にはまだこのような準備がありません。また木材の性能については、日本では非常に高値で木材が売れた時代がありましたので、山元の品質管理が甘いのです。林業についての指摘は自分に戻ってきますが、ウッドマイルズを減らすことは、皆の共通課題です。林業関係者も協力しなければ、ウッドマイルズは減りません。例えばドイツやオーストリアの人達が日本のマーケットを一生懸命調べ、どのような木材を出したら日本は買ってくれるかを追求した訳ですが、日本の林業はそのような努力を今までやってきたのか、ここにもまだ大きなギャップを感じています。我々山側も反省すべきことがたくさんあります。川上、川下が連携して、ウッドマイルズを減らしていきたいと思います。

中桐(会場) 山梨県の中桐です。熊崎さんが言われたように林業現場をどうしていくかを考えています。多くの分野の方々からの林業への期待が高まる中、林業の現場の実態としては、今まで木を植えて育てて資源を作ってきたという行政も含めた組織、団体がありますが、循環利用をどうしていくのかについてはプロ化されていないと思います。一部の先鋭的なところ、または国でもこれらに関する指導も行われつつありますが、このレベルについていけない地域に対する具体的な指導は示していませんので、都道府県、地域レベルで対策を採らなければいけないと感じています。山梨でも人材不足で、森林を劣化させない管理をするためには、下流からの人材流入がないと難しいと思います。これがないと林業現場は低レベルな森林管理で、素材生産のみが行われるというのが現状です。一部の地域だけではなく全国的に林業を高いレベルにするためには人材不足であり、だからそこに参入していかなければならない、ということをご皆さんに理解して頂けたらと思います。

三澤 熊崎さん、中桐さんのお話の中で、林業側の努力が足りないということがありましたが、箕輪さんの方から、本日は森林代表ということで、コメント頂けますでしょうか。

箕輪 私は学者なので、学者もまだ努力が足りないと言われていたと感じましたが、この問題はとても根が深いので、簡単に努力が足りないとは言えないと思います。日本の林業政策は、戦前は国有林を中心に展開されてきました。民有林に対しても全くやってこなかったかというそうではなく、例えば私の所属する大日本山代会は今年で127年目を迎えています。民間に対する森林情報の提供をやってきました。これが何の役に立っているのかと言いますと、プロ化していないとか、現在の建築技術の要請に答えられていないとか、細かいことも言われますが、やはり過去の歴史を振り返らないと何も見えないと思います。日本の森林・林業は、100年200年先にも森林を継続していくという考え方でやってきました。それが崩れたのが戦後の高度経済成長期です。業界から国有林に対して「何をやっているんだ、木を伐れ」という声

高まり、当時もそう簡単に木は伐れませんという人もいたと思いますが、結局業界の要請でどんどん木を伐ることになりました。このような歴史的な流れがあります。経済だけではなく台風などの自然災害も含めた様々な要因の中で、今の森林の姿がある訳です。学術的に、林業は何をやってきたんだと問われれば、日本はドイツの林学を輸入して、ドイツの考え方でやってきました。伐採期間を何年とするのか、将来どのくらいの蓄積を持つのか、密度管理はどうするのか、地理をどのようにはかるか等、これらはそれなりの成果を持っている訳で、例えば、精度の問題はありますが全国の森林簿整備など、このような体制が出来上がってこの100年来ています。ここにきてプロ化していない等と、簡単に言う人もいますが、私はそんな簡単なものではないと思っています。CO2の問題、森林の多面的機能の評価試算など、新しい社会の要請に答えられていない面もありますが、これらの環境機能や多面的機能について最も早くから考えてきたのは林業界だと思います。国土保全や保安林制度に象徴されるように、森林をそれなりの計画制度をもって管理してきた訳ですから。このような状況になったのは、やはり政治が悪いです。何故、木材を80%も輸入してくる制度にしたか、コメは日本の農業を守るためにそれなりのことがやられました。木材の徹底的な自由化から始まった問題であり、日本の林業技術の不足や努力して来なかったということだけが原因ではなく、日本の産業政策全体の問題として捉えなければなりません。ウッドマイルズはそういうところに大きな力を持つものだと認識しています。冒頭に図を示したのもそういうことですが、常に社会全体をどう捉えるかという頭を持っていないと、技術だけの議論になりますし、リスクもあるということです。

三澤 どんどん力が入ってきましたね。ピシピシきました。時間も終わりになってきましたので、そろそろしめたいと思いますが。

箕輪 最後に、資料に林野庁の「木材利用に係る環境貢献度の定量的評価手法について(中間とりまとめ)」があります。見える化の委員会で決めた、省エネ資材、炭素の貯蔵、森林整備への貢献、という3つの定量化手法が載っていますので、また見ておいて下さい。

三澤 森林・木材・家づくりで連携していこう、ということが本日のテーマでした。後半は議論が熱くなりましたが、このように本気で議論をしていかないと深まっていけないと思いますので、今日の交流会等でも活発な議論を期待しています。最後に藤本さん、お願い致します。

藤本 川上・川下の連携はやらざるを得ません。国や政治の政策ということもありますが、我々設計者も、この環境の時代において、よい家をつくるよう努力しますので、是非川上の方でも努力すれば今ここまで出来る、というメッセージを出して頂きたいと思います。またそのような人がどこにいるのか、人の見える化もしてもらいたいです。木材よりも人が見たいです。そのように川上・川下で連携して、実践で戦える7人の侍のような集団を我々が作っていかなければなりません。ウッドマイルズ研究会も、この戦う集団として盛り上げていきたいと思っています。

(以上)